

introduction

本号では上肢における骨壊死疾患の特集を企画いたしました。その代表格である Kienböck 病と Preiser 病はともに 1910 年にレントゲンによって X 線が発明された 1895 年のわずか 15 年後に、それぞれの病名の由来となった名の放射線科医により報告されました。以来、100 年以上にわたって多くの先人達により病態の解明と治療法の開発への努力が継続されてきました。現在においても関連学会では毎年のように大きなテーマとして研究成果が発表されています。しかしながら、多くの知見が集積されてきたものの、病態解明と標準治療の確立について結論に至ったとまではいえないのが実情ではないかと思います。

その一因として、その数字は正確には知られていませんが、有病率もしくは発症率が僅少であることが考えられます。日本学術振興会の科研費ホームページによると、ある大学で Kienböck 病のコホート研究が進行中であり、非常に興味深く結果が待たれるところがあります。少ない有病率の疾患の研究を進める対策の 1 つとして症例のレジストレーションを行うことが考えられますが、今後の課題といえるでしょう。

いずれにしても、成書あるいは整形外科雑誌などで上肢の骨壊死疾患にフォーカスされたものはほとんどなかったため、1 世紀以上も続いてきた研究の現在地点としての診断と治療のアウトラインおよび最新の知見を若い先生方に知っていただきたいと考え、本特集を企画した次第です。各執筆の先生方には大変わかりやすく解説していただいておりますので、読者の先生方にはさっそく明日からの診療にお役立ていただけるものと思います。

そして、本書を手にした方のなかから、疾患に対する興味を深めて次の 100 年に向けた研究の緒を担う若い先生が出て来ることを切に願っております。

流山中央病院
國吉一樹